『老子』の道と身体

――言分けから身分けへ――

橋本敬司

【キーワード】身体・身分け・言語・言分け・物象化

一　はじめに ―言分けから身分けへ―

人は常に自己と世界の安定を求める存在である。それは、事物に意味を付与して了解可能な存在へと実体化し自己の世界の中に定位させる認識行為として行われる。この認識を可能にし、新たに自己と世界を作り出す方法あるいは媒体として、身体と言語がある。身体によって世界が分節され自己が分節され意味付けられて概念化主体化されることを身分けと言い、それが言葉によって行われることを言分けと言う。[1] 人は、この身分けと言分けを、関係の場において繰り返しながら自己と世界を主体化意味化していくのである。この主体化と意味化のダイナミズムの後に、主体と意味が物象化されて残される。その主体と意味を捉える営みが所謂解釈であるが、これは事物及び関係を実体的に捉える物象化の運動そのものである。ここにおいて、その事物の由って来たダイナミックな関係は見落とされ、事物はそれ自体が本来的に不変の本質を備えていると認識され、関係もまた不変の道理として固定化・秩序化という物象化を蒙ることになるのである。これが、事物はあらゆる関係に先だって本質という存在の意味を備えているとする存在の物語である。このような実体論的視座が、『老子』の道に、存在の根源、万物生成の始源といった意味を与えてきた。[2] このことによって、道は人間存在以前に在った超越的存在として固定化され、『老子』において、道という概念が必要とされ説きだされた道概念生成の関係構造は、見落とされてしまう。このような実体論的視座から、『老子』が道を説いた戦略を読み解くことはできない。本当の意味で解釈するということは、概念が如何なる関係の中で形成され如何なる構造を備えているのか、その構造と関係を読み解くことでなければならない。

本稿は、『老子』ができる限り言語を排除し、身体によって分節された即ち身分けられた世界を求めていたことを言語戦略とし

て論じた前稿[3]を受け、道概念がどのように創出されたのかを解き明かし、その物象化された道の下に世界を再構築するために、民を小国寡民に誘導する『老子』の身体[4]形成戦略が如何なるものであったのかを読み解くものである。

二　「道」による世界の再構築

1　名付けられた道

まず、『老子』の次の言説を見てみよう。

大道廃、有仁義……六親不和、有孝慈、國家昏亂、有忠臣。（18）[5]

大いなる道が廃れたから、仁義というものが生れてきたのである。……親族が睦み合わないから、孝慈が生まれてくるのであり、国家が乱れるから忠臣が生み出されるのである。

ここでは仁義、孝慈、忠臣が、大道が廃れる、親族が睦み合わない、国家が混乱するといった状況の中で生み出された概念・存在であることが説かれている。つまり、これらの価値的概念・存在はある状況が発生する以前から自立的実体的に存在したのではなく、あくまでも状況の中で選択され生み出された関係的概念・存在だったのである。

『老子』が、価値及び概念の相対性あるいは関係性を強く意識していたことは、次の言説に明らかである。「天下皆知美之爲美、斯悪已。皆知善之爲善、斯不善已。故有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音聲相和、前後相隨。（2）」と言われていたように、『老子』において、「美悪、善不善」などの価値非価値もまた実体的存在・概念ではなく、関係的に形成される概念であった。つまり、どのような価値・概念も存在も、ある状況の中で、人間の認識によって、相対的関係的に創り出されるのである。これは、世界が関係的に形成されていることを言い表している。

では、『老子』において人間存在はどうなのであろうか。次の言説を見てみよう。

其政悶悶、其民淳淳、其政察察、其民缺缺。（58）

その政治がぼんやりとおおらかであると、民は寛大でゆったりとしていて争わないが、その政治が刑名賞罰の秩序区別がはっきりしていると、民は争うのである。

政治によって民が左右される存在であるとは、政治権力が容易に民の身体を貫くことを示している。これは支配者と支配される民とが政治権力を媒介とした関係的存在であり、民もまた権力ゲームに参加する政治的存在であることを意味している。

このように『老子』おいて、支配者である聖人と被支配者である民とは、この政治権力を媒介として政治的権力関係の中に組み込まれ互いに作用しあう関係的存在として認識されていたのである。特に民は、政治システムの中で、権力の浸透により身

体をどのようにでも作り変えられる者のことだったのである。[6]

そこで、『老子』は次のように言っている。

聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸。（57）

聖人は言う。私が無為の政治を行えば民は自ずから感化され、私が平静を好めば民は自ずから正しくなり、私が無事の政治を行えば民は自ずから豊かになり、私が無欲であれば民は自ずから素朴になる。

聖人が、民との関係の中で「無為、好静、無事、無欲」の身体を形成するのであれば、民は「自ずから」即ち自然に「化し、正し、富み、素朴になる」身体を形成すると言う。

また次ぎのような言説もある。

太上、下知有之。其次、親而譽之。其次、畏之。其次、侮之。信不足焉、有不信焉。悠兮其貴言。功成事遂、百姓皆謂我自然。（17）

太上即ち大人である君主は、下即ち民が太上が存在することを知っているだけなのが最もよく、その次が太上に親しみ賞賛する、その次が畏れる、その次が侮るというものである。信が足りなければ、信頼されない。だから、悠然として言葉を大切にする。功が成就し事業が完成すると、百姓の民は我々はただ在るがままにしてそうなったのだと言うのである。

大人たる君主即ち聖人の民に対する理想的な関係とは、ただその存在を知るだけで、そこで行われること即ち支配のための権力行使を百姓即ち民が「自然」[7]だと感じることであった。『老子』において、太上である聖人の権力を政治的重圧として感じるのではなく「自然」な関係を結ぶことが支配者と被支配者との理想的関係として求められたのである。しかし、支配という身体を抑圧し束縛する権力の行使を、民に「自然」だと感じさせることは、決して容易なことではない。だからこそ、『老子』の「自然」とは、民自身が自らの意志でその政治の権力システムを自然に受け入れ支えていること自体さえ意識化させずに自然だと思わせる、高度な政治戦略だったのである。

ところが、この『老子』の、民が聖人に従うのが自然であるとする「自然」は、何か実体を伴った概念でも存在でもなく、『老子』が恣意的に見出した関係的概念であり、また、それを「自然」と判断する根拠はどこにも無い。従って「自然」と言うだけでは、共同体形成と統治において方向性をもたず、共同体成員が身体を形成するための文法・規範性を備えておらず、全ての人が共有できる制度として社会化された概念だとは言えない。

そこで『老子』は、この「自然」を、道という方向性を備えた概念によって再規定するのである。[8]

有物混成、先天地生。寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可

以爲天下母。吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大。大曰逝、逝曰遠、遠曰反。故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。人法地、地法天、天法道、道法自然。（25）

渾沌とした物が天地という秩序有る世界以前に存在していた。寂寥としていて、それだけで存在し何も変わることはなく、遍く行きわたり止まることがなく、世界を生み出す母なる存在である。私はその名前を知らないので、仮にこれに「道」と名づける。また無理に名づけて「大」と言う。大であれば逝き、逝けば遠く、遠ければ反る。だから、道は大であり、天は大であり、地は大であり、王もまた大である。世界の中には四つの大が有って、王はその一つに居る。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法るのである。

この言説から道とは、価値・概念として実体的に在った、あるいは在る存在ではなく、天地万物を生成する働きとしての自然に法りそれに名付けられた、人間の知が創り出した概念であることが読み取れる。しかし、この宇宙論的自然を道と名付けたことは、同時に、支配者である聖人と被支配者である民との権力関係の「自然」もまた、道として言分けられることをも意味している。つまり『老子』の道とは、宇宙論的概念の中に政治的戦略が隠蔽された概念だったのである。

四

2「道」による世界の再構築 ―「自然」の秩序化―

自然を道と言分ける根源的言分けを行った『老子』は、道を更に言分けて、道の意味を生成し、世界を言分けていくのである。

道生之、德畜之、物形之、勢成之。是以萬物莫不尊道而貴德。道之尊、德之貴、夫莫之命而常自然。（51）

道が物を生み、その德が物を養い、形を形成し、当然の趨勢として成長する。だから万物は道を尊び德を貴ぶのである。道が尊く德が貴いのは、そもそも物に命じることなく常に自然だからである。

ここでは、道が物を生成し養い成長させるという方向性が自然である、と説いているが、これは、自然を道と名づけたことは、関係が全く逆転していることを示している。つまり、道は、道と名付けられ物象化された時から、道という概念が生成された構造を反転あるいは隠蔽し、逆に道が自然を本質とする実体的絶対的根拠となることを意味している。『老子』は続けて、この道が世界を生成する営みのことを「玄德」と言う。

故道生之、德畜之、長之、育之、亭之、毒之、養之、覆之。生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂玄德。（51）

道は万物を生じ、德が万物を養い、万物を生育させ、成熟させ、養い庇護する。万物を生成してもそれを自分の所有とはせず、何をしてもそれを自慢せず、物を成長させても

主宰はしない、これが玄徳である。

このように、『老子』は道を世界生成の根拠として実体化絶対化していくのである。

次ぎの言説を見てみよう。

道生一、一生二、二生三、三生萬物。（42）

道者萬物之奥。（62）

道は正しく全てのものに先だって存在する実体となり、万物生成の始源、存在の根源として絶対化され、世界は、道から生成され、道を根拠に存在することになるのである。

「道常無名（32）」、「道隱無名（41）」であった道が、道と名づけられた時から、「道可道、非常道。名可名、非常名。無名天地之始、有名萬物之母。（1）」と、常道即ち永遠不変の道として概念化され、その絶対性と超越性が語られるのである。

この実体化され絶対化された道は、更に天という人を超越した概念によって言分けられ、その絶対性はより一層高められていくのである。

天之道、不爭而善勝、不言而善應、不召而自來、繟然而善謀。天網恢恢、疏而不失。（73）

天の道は、争うことなく勝ち、言わなくとも応じ、招かなくとも自ずからやってき、ゆったりとして私心なくしっかりと企てる。天の網は大きく目が粗いが、万物を覆い尽くして取り逃がすことはない。

と、天網の張り巡らされた道の世界は、道が万物を生み万物に方向性を与える自然なるコミュニケーション・ネットワークの世界として再構築されるのである。

次ぎの言説も、天の道の世界を説いたものである。

天之道、其猶張弓與。高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者補之。（77）

天の道というのは、矢を飛ばせたい方向とは逆に引く弓のようなものである。高い者はこれを抑え、下の者はこれを押上げ、余裕がある者は減らし、足りない者は補う。

これは、天の道が、高下、有余不足の差異をできるだけ無化する方向性にあることを説いている。つまり、道それ自体が、差異を解消する権力システムとして意味付けられていくのである。以上のように、道という概念・システムを生み出した自然というダイナミックな関係的世界は、道として命名された後は、絶対化された道によって言分けられ再構築され在るべき実体的世界へと存在形態を転換していくのである。

三　聖人の身体―権力の隠蔽―

自然が道と名付けられ、言分けられたということは、人間存在もまた同様に言分けられることを意味している。

『老子』においては、始めから聖人と民という安定した主体的存在があって、その間にコミュニケーションが形成されるので

はない。「自然」なる政治的権力関係を担う聖人と民とは、コミュニケーションの場で同時に生み出される相互依存的現象であり、互いは互いの権力によって貫かれており、分離することの出来ない存在なのである。このような聖人と民は、道の下の自然なるコミュニケーションの中で聖人あるいは民として主体化され意味付けられる存在のことである。そこで、ここでは、聖人が権力を民に浸透させるために作られる「無為・好静・無事・無欲」の身体とはいかなる身体でなければならなかったのか、『老子』の言分けた聖人の身体について見ていきたい。

1　隠される身体

聖人について、『老子』は次のように言っていた。

生之、畜之。生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂玄德。（10）

物を生成し養う。物を生成してもそれを自分の所有とはせず、何をしてもそれを自慢せず、物を成長させても主宰はしない、これが玄德である。

是以聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭、生而不有、爲而不恃、功成而弗居。夫唯弗居、是以不去。（2）

聖人は無為の立場に身をおき、言葉にできない教えを身を以って行い、万物が生れてきてもそれについて語ることはなく、成長しても自分の所有とはせず、何かを為しても自慢したりはせず、功が成就してもその場に居続けないのである。居続けないからこそ、聖人の名声は失われないのである。

以上の言説から、玄德とは、「万物を生み、生かせ、成長させ、成果を得る」という万物との間の権力関係を「語り、所有し、自慢し、居続ける」ことによって、認識され物象化、価値化されないようにする戦略であることが読み取れる。

また、玄德については次のようにも言っていた。

玄德深矣、遠矣、與物反矣。然後乃至大順。（65）

玄德は、推し量れないほど深く、極められないほどに遠く、万物と相反しているかのようである。しかし最後には、大いに万物自然に順化するのである。

『老子』には次のような言説もある。

將欲歙之、必固張之。將欲弱之、必固強之。將欲廢之、必固興之。將欲奪之、必固與之。是謂微明。柔弱勝剛強。（36）

これを縮小しようとするときは、必ずしばらくこれを拡張させる。これを弱めようとするときは、必ずしばらくこれを強くさせる。これを廃絶しようとするときは、必ずしばらくこれを興隆させる。これを奪おうとするときは、必ずしばらくこれに与えておく。これを微明という。柔弱こそが剛強に勝つのである。

『老子』において自己の目的を達するためには、目的に向かって

一直線に実行するのではなく、まず逆行して、そこから反転して目的を達成するというという戦略的仕掛けが重要だと考えられていたのである。

これらの言説から、玄徳が、先ずは達成すべき目的とは全く逆の方向へ向けたコミュニケーションを戦略的に実践し、それの反作用を利用して所期の目的を達成するという、したたかな自己実現のコミュニケーション戦略につけられた名称だということが読み取れる。

次ぎの言説を見てみよう。

唯有道者。是以聖人爲而不恃、功成而不處、其不欲見賢。（77）

有道者である聖人は、何かを為しても自慢したりはしないし、功が成就してもその場に居座らないし、自らが賢者であることを見せびらかしたりもしない。

聖人は自己が賢者であるということを他者に見せない即ち認識させないことで関係を物象化して意味化し価値化することを避けるのである。これは、民、万物との関係の中で形成される聖人の関係的身体が権力そのものであることを、民、万物に認識されないように関係の中心から脱することを意味している。

『老子』は、このように権力そのものである聖人の身体が隠されることを、「聖人被褐懐玉（70）」あるいは、「魚不可脱於淵、國之利器不可以示人（36）」と喩えていた。支配者である聖人が国家を統治する方法である権力システムが如何なるものであるかを民に認識させてはならないのである。

以上の言説から、玄徳とは、聖人が、万物、民が、聖人によってどのように支配されているか聖人との関係を物象化できないように如何なる権力も感じることの無い関係を形成し、また、聖人自らの身体を民が言葉によって明確に認識できず言分けられないように隠蔽し、民からは見えざる主宰者となって民に権力を有効に浸透させ誘惑し動かす力である、と言うことができる。民は、この力の下で、権力関係の力学を認知することはできず、知らず知らずの内に誘惑され動かされ、被支配者として主体化されるのである。従って、民が認識不能であり言分けられないということにおいて自らの身体を隠す聖人には、自らに中心化された権力関係を隠蔽しつつ、自己実現するコミュニケーション戦略が物象化された一つの能力として、玄徳という名が与えられるのである。

2　差異なき身体

次ぎの言説を見てみよう。

聖人無常心、以百姓心爲心。善者吾善之、不善者吾亦善之、德善。信者吾信之、不信者吾亦信之、德信。聖人在天下、歙歙、爲天下渾其心。百姓皆注其耳目、聖人皆孩之。（49）

聖人に不変の心は無く、人々の心を自分の心としている。

善い者を善い者とし、善くない者も善い者として差別せず、善い人達を得る。誠実な者を誠実な者とし、誠実でない者も誠実な者として差別せずし、誠実な者を得る。聖人が天下にある在り方は、ひかえめにし、天下を治めるためにその心を渾沌とさせる。人々は皆その耳目を注ぐが、聖人は全ての人々を嬰児のようにさせて、耳目の欲の拡張を断ち切るのだ。

聖人の心が百姓の心と同じであるとは、聖人の心を特別に価値あるものとして差別化特権化しないことを示している。また、善者と不善者との区別無く共に善とし、信者と不信者との区別無く共に信じることは、聖人の心が全てを受け入れることであり、かつ、百姓である民が、聖人の中に価値判断の基準を見出すことが出来ない即ち言分けられないことを意味している。更に、心を渾にするとは、百姓が捉え解釈することの出来ない渾沌とした心として聖人は民に臨み、認識不能の身体を形成することである。だからこそ、これが玄徳となり、権力の中心に立つ聖人に、民は耳目を注ぎ注目するのである。しかし、権力の中心に注意を向けることは、権力ゲームへの積極的参加を意味している。そこで、聖人は、権力ゲームに組み込まれ共有していることを民に認識させないために、百姓を嬰児のように認識も判断もできない状態にさせるのである。このように『老子』の聖人は、自らの身体を認識論的に解釈不能の身体として隠すことで、民にその行動の方向性を指し示さず、判断を停止させるのである。

聖人がその身体を認識させない隠蔽の最もラディカルな方法は、民と同一化してその差異を解消し、聖人と民の間に権力によるコミュニケーションが成立しないかの如くすることである。このことを『老子』は玄同と言う。

知者不言、言者不知。塞其兌、閉其門、挫其鋭、解其分、和其光、同其塵、是謂玄同。故不可得而親、不可得而疏、不可得而利、不可得而害、不可得而貴、不可得而賤。故爲天下貴。（56）

知っている者は言わないが、言う者は知らない。欲の生じる感覚器官を閉ざし、鋭利さを挫き、争いを解除し、知の光を和らげ、塵に同化することを、玄同と言う。玄同の人とは、親しむことも、疎んずることも、利することも、害うことも、貴ぶことも、賤しむこともできない。だから天下で最も貴いのである。

和光同塵とは、自らの知の光を和らげてその存在を顕示せず、塵である無知の民に交わり身体を同化させることで解釈不能にし言分けられないようにして隠蔽することである。これにより、知者である聖人は「親しみ、疎んじ、利し、害し、貴び、賤しむ」ことのできない身体即ち民からはコミュニケートすることのできない身体を形成するのである。このようにコミュニケー

八

ションが成立しないということは、聖人の身体を言分けてその権力のシンボルである関係的身体を認識することも、主体的に分有することも不可能であることを意味している。つまり、民が、主体的自覚的に聖人との関係を形成することも、それを意識化することもできないまま聖人の隠された無為の身体の中を生きる存在となるように、聖人は和光同塵という差異を無化する身体を戦略的に形成し権力システムを隠蔽するのである。だからこそ聖人の身体だけは、民の身体とは異なる戦略的身体となって、唯一権力システムを隠蔽する貴き身体となるのである。

3　争わない身体

『老子』は、次ぎのように言っていた。

天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生。是以聖人後其身而身先、外其身而身存。非以其無私邪。故能成其私。（7）

天地は永遠である。天地が永遠であるのは、天と地が自ら生き続けようなどとはしないからである、だから永遠に生き続けることができるのである。聖人は、その身を人の後におくからこそ人に先んじ、その身を外におくからこそちゃんと存在しているのである。無私だからではないか。だからこそ私を完成実現することができるのだ。

聖人が身を後にし身を外にすることは、自らの身体を明示的に形成することのないように、他者との関係の場において脱中心化することであり、これこそが聖人が私即ち自己を実現する方法であった。では、この身体を関係の場から脱中心化するコミュニケーション戦略によって齎される自己実現とは一体何だったのだろうか。

『老子』には、以下のような言説がある。

是以聖人抱一爲天下式。不自見故明、不自是故彰、不自伐故有功、不自矜故長。夫唯不爭、故天下莫能與之爭。（22）

だから聖人は、一である道を守って天下の模範となるのである。自ら見せびらかさないからこそ自己の存在は明白となり、自ら正しいとしないからこそ正しさが顕彰され、自ら手柄があるとしないからこそ成功を治め、自ら尊大にならないからこそ長くやっていけるのである。そもそもただ争わないから、天下にこれとよく争うことのできるものは無いのである。

この言説から、天下の式即ち模範・手本となる聖人が、権力の中心にいることは明らかである。しかし、聖人は、その存在を見せびらかさず、正当化せず、誇らず、尊大にしないことで、その言分けられた身体を脱中心化して、権力である自らの言分けられた身体を民から隠して権力闘争を生まないようにするのである。これは既に明らかなように、権力の中心を隠蔽し、政治的権力ゲームの無効性を示唆する聖人のコミュニケーション戦略

に他ならない。従って、誰も、聖人と争いその言分けられた身体即ち権力システムを傷つけることはないのである。

次の言説を見てみよう。

是以欲上民、必以言下之。欲先民、必以身後之。是以聖人處上而民不重、處前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不爭、故天下莫能與之爭。（66）

だから聖人が民の上に立つためには、必ず言葉遣いを謙虚にし、民に先んじるためには、必ず身振りを控え目にする。だから、聖人が上即ち政治の中心にいても、民が重圧は感じることは無く、民の前に立っていても、民の心を害うことはない。だから天下の人々は喜んで聖人を為政者に戴く。聖人は争わないから、誰もこれと競うことはできないのである。

これも、聖人が、民に対して抑圧的高圧的存在ではなく、重圧を感じさせることも害うこともない身体を戦略的に形成することにより、権力闘争を回避することを説いた言説である。また「聖人之道、爲而不爭（81）」とも言っていた。為しても争わない即ち行動は起こしても権力闘争のない世界を実現して、権力闘争のゲームである政治に左右される政治的存在である民を、権力闘争を認識することのない世界の住人へと誘惑することが、聖人自らの存在と権力を安定させる唯一の方法即ち聖人の道だと考えたのである。

『老子』の聖人は、戦略的に自らの言分けられた身体を脱中心化し隠すことにより、自らが中心に立つ世界から権力闘争を排除して、世界の安定を維持して、その身分けられた身体を長く生き自己を実現して自らを主体化するのである。

4　道と一体化する聖人の身体

民から言分けられることのない聖人の身体を、『老子』は「侯王」という概念を持ち出して、次のように言分けていく。

道常無名。樸雖小、天下莫能臣也。侯王若能守之、萬物將自賓。天地相合、以降甘露、民莫之令而自均。（32）

道は常に無名である。樸は小さいけれども天下にこれを臣下にできる者はいない。王侯がもし道を守るなら、万物は自ら王侯に仕えようとするであろう。天地も共鳴して甘露を降らせ、民はこれに命令しなくとも、皆等しく治まるのである。

道常無爲、而無不爲。侯王若能守之、萬物將自化。（37）

道は常に無為であって為さないことはない。侯王が道と同様に無為を守ることができれば、万物は自ずから変化する。この侯王である聖人が、道の在り方を守ることによって、聖人の身体はその道によって支えられ、また道そのものとして価値付けられ実体化されていく。このように、道そのものが聖人の身体を形成する文法であり根拠となるのである。

次の言説を見てみよう。

孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃、功成而不處、其不欲見賢。（77）

一体誰が、有り余った物を天下の人々に振り分けることができるだろうか。それは、道を得た者だけである。……

聖人の身体は、道を得た存在、道と同様に玄徳を備えた者として、道の名の下に絶対化される。即ち、道と全く同様に言分けられた身体として聖人は実体化物象化され価値ある存在となるのである。

5　まとめ

『老子』において、聖人が形成しなければならない「無為・好静・無事・無欲」の身体とは、民との関係の場から脱中心化し、その関係が民によって言分けられて物象化され意味化されないように解釈不能の身体を形成し、聖人を頂点とする権力ゲームを隠蔽して、権力の中心に立つ聖人及びその権力へと向けられた民の志向を遮断し、民を無知無欲で認識能力のない嬰児のようにして、聖人の身体が認識できない判断停止の状態に追い込み、権力闘争に参加させず、権力の陥没地帯・無重力場を創り出すためのコミュニケーション戦略として形成されたものであった。従って、天下の中心に立つ聖人の身体とは、民との差異を無化し、権力関係そのものである言分けられた関係的身体を隠蔽する戦略的に身分けられた身体であり、聖人とは、この権力と権力隠蔽システムに名付けられた名前だったのである。[9] ところが、『老子』においては、道の下に世界が再構築されるとともに、聖人の身体は、「玄徳、抱一、天下式」などといった言葉によって、道と一体化した価値あるものとして物象化実体化絶対化され、道の世界に組み込まれるのである。

四　民の身体

以上のような身体を形成する聖人と権力関係を結ぶ、もう一方の担い手である民に、『老子』は如何なる身体を形成して主体化するように説いたのであろうか。

1　無知無欲の身体

『老子』は、学問を放棄して知的に即ち言語的には身体を拡張しないことを説く。

絶聖棄智、民利百倍。絶仁棄義、民復孝慈。絶巧棄利、盗賊無有。此三者、以爲文不足、故令有所屬。見素抱樸、少私寡欲。（19）

聖智を棄て去れば、民の利益は百倍となり、仁義を棄て去れば、民は孝行と慈しみに復帰し、巧利を棄て去れば、盗賊はいなくなる。この三つの言説では足りないので、もう少し言葉を継ごう。素朴になり、私欲を少なくすることで

ある。

ここでは、聖、智、仁、義、巧、利といった関係を物象化することで意味化された知的道徳的経済的などの社会的価値を排除し、言分ける前の「素樸」に復帰して、私欲を少なくする身体を形成せよと言う。

また以下のような言説もある。

絶學無憂（20）

学ぶことを止めれば憂いはなくなる。

爲學日益、爲道日損。損之又損、以至於無爲。無爲而無不爲。（48）

学問すれば日ごとに知識は増すが、道を行えば日ごとに知識、欲は減っていく。これを減らしまた減らして、無為に至る。無為であるけれども、一切の事をなすのである。

学ぶとは、言分けによる知的身体の拡張に他ならないが、それを廃止して知を削ぎ落とし、言分けられない無為の身体へと至ることが求められるのである。

次ぎの言説を見てみよう。

五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁畋獵令人心發狂、難得之貨令人行妨。是以聖人爲腹不爲目。（12）

様々な美しい色が人の目を見えなくさせている。様々な美しい音楽が、人々の耳を聞こえなくさせている。様々な美味しい物が人の口の味覚を損なわせている。乗馬や狩猟などの遊びが人々の心を惑わせている。手に入れ難い貴重な物が、人の行いを誤らせている。だから聖人は、カラダである腹の欲求を満たすためにして、身体である目の欲望のためにはしないのである。

自己の外に存在する様々なる物が、目耳口心といった感覚器官、またその身振りである行いをも損なわせてしまうとして、自己の外にあるものによって自己実現を求める言分けられた欲望による身体の形成拡張が否定され、腹即ち自己の生理的カラダから発せられる欲求によって身分けられた身体に回帰することが求められるのである。

不尚賢、使民不爭。不貴難得之貨、使民不爲盗。不見可欲、使民心不亂。是以聖人之治、虚其心、實其腹、弱其志、強其骨。常使民無知無欲。使夫智者不敢爲也。爲無爲、則無不治。（3）

為政者が賢者を尊ばなければ、民の争いを無くすことができる。得がたい物を貴ばなければ、民に盗みをしないようにさせることができる。欲しいものを見せなければ、民の心を乱さないようにすることができる。よって聖人の政治は、心を空っぽにしてその腹を満たし、その志を弱くして、その骨であるカラダを強健にするのである。民を無知無欲にさせ、民を無知、無欲にさせ、知恵ある者にも何もできないようにさせる。無為を行ったなら治まらないことは無

いのだ。

賢者を尚び、手に入れ難い物を求め、欲しい物を手に入れる、という知と欲の方向性を生む根源である権力の中心に立つ為政者・支配者である聖人は、賢者を尚ばない、得難い物を貴ばない、欲するものを示さない、という権力の力学を成立させない身振りによって、民をして、争うことも盗むことも心を乱すことも無くさせ、知と欲が自己実現を目指して身体を言分け拡張する方向性を断ち切るのである。このように『老子』は、民を無知無欲の判断停止の隘路へと追い込むことで、言語的に拡張され言分けられた身体を解体して、自らの腹と骨という身分けられた生理的身体であるカラダ即ち無知無欲の身分けられた身体をこそ形成させようとするのである。

2　愚者としての身体

また、民の愚民化を示唆する言説もある。

古之善爲道者、非以明民、將以愚之。民之難治、以其智多。故以智治國、國之賊。不以智治國、國之福。（65）

古の上手く道を行う者は、民を明晰にするのではなく、民を愚かにしようとするのである。民が治めにくいのは、民の知ることが多いからである。だから、智で国を治めるのは、国を滅ぼす賊である。智で国を治めないのは、国にとっての幸せである。

ここで言われるように、智の多い民が治め難いということは、言語的に言分けられ拡張し差異化した身体を一つの権力システムによって統治することが困難であるということに他ならない。従って、民を愚民化するということは、単に民を智の無い愚者たらしめることを意味するのではなく、権力が容易に浸透し統治しやすいように民に差異のない均一なる身体即ち身分けられた身体を形成させることを意味している。こうして初めて、民は権力を巡る争いに巻き込まれることなく、権力を自ら支持する存在となるのである。

3　身（カラダ）への監禁

『老子』は、身即ちカラダへと人々を閉じ込めようとする。

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。是故甚愛必大費、多藏必厚亡。知足不辱、知止不殆、可以長久。（44）

名誉と身とどちらが自分にとって切実か。身と財貨とはどちらが大切か。利を得ることと身を喪うことどちらが悩むべきことか。だから愛着し過ぎると必ず大いに浪費し、沢山隠し持っていると必ずごそっと失うことになる。足ることを知っていれば身は辱められることはなく、止まることを知っていれば身の危険はない。だからいつまでも長らえることができるのである。

『老子』において、名誉という社会的に言分けられた身体、財貨

という経済的に言分けられた身体よりも身即ち生身のカラダの方が切実で大切であった。だからこそ「知足・止足」という欲望の充足による身体の拡張を抑えてカラダの欲求である安全と長久を願うのである。『老子』は、カラダに回帰することで、知と欲をエネルギーとして社会的経済的に言分けられ拡張された関係的身体を解体しようとしたのである。ところが、これはコミュニケーションによる身体形成の否定であり、端的に言って、他者と共に生きる人間としての存在の否定に他ならない。しかし、このことによって、『老子』は民を自らの命の場所として身分けられた身体であるカラダに監禁しようとしたのである。

「民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者、吾得執而殺之、孰敢（74）」と、民に死を恐れさせることを説いていた『老子』において、カラダは命の場として特権化される。そして、民を、死の恐怖を背景に、自らの生の特権的場であるカラダを生きる「長生久視之道（59）」へと、誘う。これは、知と欲望によって形成された関係の中で社会的経済的に言分けられ拡張された関係的身体を否定解体し、身分けの身体そのものであるカラダへと回帰することで自らの命を生きさせることを意味している。

4　小国寡民 ―監禁システム―

以上のように、民の身体を作り変えるためには、在るべき理想の権力関係・権力システムを構築しなければならない。これを『老子』は「小国寡民」と言う。

小國寡民。使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙。雖有舟輿、無所乘之。雖有甲兵、無所陳之。使人復結繩而用之、甘其食、美其服、安其居、樂其俗。鄰國相望、雞犬之聲相聞、民至老死不相往來（80）

小国寡民。たくさんの道具が有っても使わせないし、民には死を重んじさせ遠出をさせないようにする。舟や車があっても、これに乗ることがない。よろいや武器を見せることもない。人々には昔のように縄を結んで数をかぞえるやり方をさせ、その食べるものを美味しいと感じさせ、その服を美しいと感じさせ、その住居に安心して住まわせ、その生活習慣を楽しませる。こうであったなら、隣の国が見えていて、鶏や犬の鳴き声が聞こえても、民は年老い死に至るまで互いに行き来することはない。

多くの『老子』研究は、この言説から、のどかな田園風景を想像させる古の理想社会を読み取る。[10] 確かに、昔のように縄を結んで数をかぞえ、衣食は足り、習俗に慣れ楽しむという小国に満足する生活は、そのようなユートピア的理想社会を連想させはする。しかしそこは、食べ物をうまいと感じ、服を美しいと感じ、住居に安んじ、風俗を楽しむ身分けられた身体があるのみで、共同体を秩序化し維持する言葉を必要としない世界であ

った。民が船や車に乗ることも、戦争をすることも無く、すぐ隣の国にさえ死に至るまで行き来することもないとは、社会構造的には他国との交通交流を絶つことであり言語の交換もないことを意味している。従って、小国寡民とは、互いに望むことのできる隣国からは鶏や犬の鳴き声は聞こえても民の声を聞くことはできないような、言葉を奪われた民を囲い込み監禁する共同体のことだったのである。このような小国寡民こそが、貴重な手に入れ難いものの存在を民に知らせず、それを手に入れたいという言分けられた欲望を生じさせず、また他の世界が如何なる世界であるかを知らせず、他国へ行きたいという言分けられた欲望も生じさせないという、交通と交換による知識の拡大と欲望の増殖を断つことによって言分けられた身体を解体し、身分けによってのみ形成される身体を生きていく民を統治するための、戦略的監禁システムだったのである。

5　原身体への回帰

小国寡民の監禁システムの中では、身分けによる民の身体は、でき得る限り縮小され、最終的には産み出された瞬間の嬰児の世界即ち母なる道と切り離されることのないカラダそのものへと還元されることになる。

天下有始、以爲天下母。既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、沒身不殆。塞其兌、閉其門、終身不勤。開其兌、濟其事、終身不救。(52)

天下という世界には始源がありそれを天下の母とする。その母が理解できて、その子が解るのである。その子の在り方が理解できて、また母である道を堅く守ったなら、身を終えるまで危険はない。欲を生じる感覚器官を閉ざしたなら、身を終えるまで疲れ苦しむことはない。欲を生む感覚器官を開けたまま物事を成就しようとすると、身を終えるまで救われることはない。

母なる道そのものとして捉え返されたカラダを身体として生きて行けば終身安寧だと言われる。

また、このカラダは次ぎのように説かれる。

含徳之厚、比於赤子。蜂蠆虺蛇不螫、猛獸不據、攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而全作、精之至也。終日號而不嗄、和之至也(55)

内なる徳の豊かなものは、赤子に喩えられる。赤子は、蜂やさそり蝮といった毒虫も刺さず、猛獣も襲いかからず、猛禽も襲いかからない。骨格は軟弱で筋力は柔弱であるが手はぎゅっと固く握っている。未だ男女の交わりは知らないが、完全なままに成長するのは、精が最高だからである。一日中泣いても声が嗄れないのは、調和が最高だからである。

この言説に明らかなように赤子に比せられた人のカラダは、生

命力そのものであり、それだけで完全な存在なのであった。

そこで『老子』は、次のように言う。

故從事於道者、道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者、道亦樂得之。同於德者、德亦樂得之。同於失者、失亦樂得之。（23）

道に従って生きていくなら、道のままである者は道と同じであり、道を得ようとする者は道を得ることと同じであり、道を失おうとする者は、失うことと同じなのである。道と同じになろうとする者は、道もやはり同じになること楽しむ。德と同じになろうとする者は、德もやはり同じになること楽しみ、道を失おうとする者は、失もやはり同じになること楽しむ。

このように、人が道に従って生きる、同化することによって、直接無媒介的に一体化可能であることを『老子』は説く。これは結局、カラダにおいて、人と道とが一体である即ち道には生命そのものとしての意味が付与されることを意味している。

この道との一体化を、『老子』は「復歸於嬰兒」「復歸於無極」「復歸於樸」（以上28）と、復帰だと言う。この嬰兒、無極、樸への復帰とは、一定の方向性に基づいて分節され意味化価値化されていない生命力そのものであるカラダ即ち道へ復帰することの比喩である。嬰兒、無極、樸と、比喩として言語的に分節されてはいるものの、社会的には一切の意味化も受けていないし言分けられてもおらず、差異のない道そのものであり生命力そのものであるカラダこそが、全ての人間存在が共有する同質の原身体として実体化され特権化されるのである。このように、聖人の身体と同様に民の身体もまた、道との関連において実体化即ち原身体化が行われ、民は初めからそこに存在するかのごとき道と不離の関係にある特権化された原身体に閉じ込められることになる。これは、紛れもなく、身体を言分け拡張して権力闘争に加わることを否定し、小国寡民の世界へと従順に監禁される身分けられた身体を原身体化し、全ての人々が共有し共に生きることができるようにするための身体の制度化なのである。

6　まとめ

以上のように、『老子』は、関係・コミュニケーションの中で経済的社会的に言分けられた民の身体を解体して、できる限りコミュニケーションの世界を縮小させ、同時に、知と欲望の拡張であるコミュニケーション形成の前提となる差異を生成することの無いように民の身体を同一化させ、自ら身分けによって道へと回帰する身体を形成させて、小国寡民の共同体に自主的に監禁されるよう誘惑するのである。民にこのような身体を形成させることができて初めて、民は、自らを主体的に小国寡民という監禁システムに囲い込み、且つそのシステムを支える住人に相応しいように自らを主体化することが自然である、と感じ

られるようになるのである。

五　終わりに

次ぎの言説を見てみよう。

三十輻共一轂、當其無、有車之用。埏埴以爲器、當其無、有器之用。鑿戸牖以爲室、當其無、有室之用。故有之以爲利、無之以爲用。(11)

車輪は三十本の輻が一つの轂に集まってできているが、轂の中心が無だから、車輪としての用がある。粘土をこねて器を作るのだが、その内側が何もない無だから、器としての用がある。戸や窓を穿って部屋を作るのであるが、室内に何もない無だから、部屋の用がある。だから、有が利を生むのは、無がそれを支えてその用をさせているのである。

この言説は、有である物が無である見えざる関係によって支えられていることを説いたものだと読むことができる。つまり、関係論・身体論から読み解けば、道の下、物象化された聖人と民の可視の有である言分けられつつ身分けられた実体的身体像は、それを生成する権力システムの中でコミュニケーション戦略によって形成された不可視であることで無とされる言分けられた関係的身体に支えられているということである。

要するに、『老子』は、小国寡民の共同体に監禁された民が、その共同体システムを破壊することのないように、その有であるカラダ即ち言分けを解体したところに見出された身分けられた原身体を生きるように、見えざる権力という言分けの文法を道というシステムを通して民の身体に浸透させようとしたのである。これは、権力ゲームを構成しながらもそのことに気づかせることなく、権力闘争から排除されるように言分けられた身体を解体し身分けられた身体を形成させることであると同時に、聖人自らが、権力ゲームの中心に存在する権力そのものである自らの身体を全ての関係から脱中心化し、民に対して認識できない身体を形成して、権力ゲームへの志向を無化させ、自らの権力ゲームの存続を図る戦略でもあった。

さて、以上論じてきたように、『老子』において、道という言葉の創出は、その基づくところの自然に方向性と安定性を与えると同時に、その規範性によって民への権力の浸透を却って自然だと認識させ、民を監禁システムに組み込んで行く自然を絶対とする物語を完成する戦略であった。つまり、道とは、聖人が民と形成する権力関係を全て自然であると認めさせて、民を身分けによって身体を形成させ支配するためのコミュニケーション戦略の一環として生み出された権力隠蔽のためのシステムだったのである。

ところが、このように道は、権力システム隠蔽の必然性から戦略的に生成された概念であったにもかかわらず、道という名が与えられて物象化され実体化された時から、その存在が自明

であるかの如くに錯視を生じさせ、世界の始まりと共に、あるいはそれ以前から存在するかのような物語を生成し、新たに世界を再構築し、聖人と民の身体もまた、実体化された道のもとに実体化され制度化されていくのである。しかしながら、この物象化実体化によって、人々は制度化された道を共有し追体験することが可能となり、自らの身体をシステムにあわせて身分け実体化し、安定した共同体の権力システムを支援することができるのである。ここに小国寡民の共同体は、道という制度秩序であるシステムの下に再組織化されながらも、民にとっては共に生き共有することのできる非政治的空間となり、その支配者である聖人の権力は決して侵されることはなくなるのである。ここに新たな政治的支配の物語が形成されるのである。これこそが、『老子』というテクストの戦略だったのである。

注

① 身分けと言分けについては、丸山圭三郎『文化記号学の可能性』日本放送出版協会　一九八三年参照

② 木村英一『老子の新研究』創文社一九五六年、大浜皓『老子の哲学』勁草書房一九六二年、福永光司『老子』上下　朝日新聞社一九六八年、など

③ 「戦略の言説『老子』」『広島大学文学部紀要』第60巻　二〇〇〇年　参照

④ 身体について、ミシェル・フーコーには次ぎの言説がある。「身体は政治の領域のなかに投げこまれているのであって、権力関係は身体に無媒介な影響力を加えており、身体を攻囲し、それに烙印を押し、それを訓練し、責めさいなみ、それに労役を強制し、儀式を押しつけ、それらから表徴を要求するのである。」（『監獄の誕生』30頁　新潮社一九七七年）。市川浩は次ぎのように言っている。「つまり身は固定した一つの実体的統一ではなく、他なるもの―他なるもののなかには物もあれば他者もあるわけですが―そういう他なるものとのかかわりにおいてある関係的な統一である。……そのかぎり身は関係的存在ですが、その関係化は同時に自己中心化でもある。自己中心化には、自己を相対的な意味で実体化するという側面があります。そのような相対的な実体化は、多極分解を防ぎ、脱中心化を通して次のより高い段階へ自己形成していく前段階として自己防衛的側面をもっている。つまり関係的存在としての身は、〈関係化〉という側面と相対的な意味での〈実体化〉という側面をもち、〈関係化〉と〈実体化〉をたえずくり返しながら自己形成していくのではないか、そういうふうに考えます。（「身の構造とその生成モデル」『身体論とパフォーマンス―別冊国文学』一九八五年）。

このように身体を捉えることは、実体論から関係論への転換を意味している。人間とは、絶え間無く変化する関係の網

の目の中で行われるコミュニケーションによって自らを主体化し意味化しながら共同体社会を生きていく関係的存在である。従ってその身体は、科学的に分析されその機能が明らかにされる生理的器官としての実体的身体ではなく、社会を生きる場とし、言語とカラダ・身体を媒介にした他者とのコミュニケーションを通して自らを主体化させつつ脱構築してダイナミックに生きる関係的身体のことである。このように皮膚という境界によって閉ざされることのない人間のコミュニケーション活動の現象と構造として捉えられた身体は、関係の変化に応じて世界と共に拡張し再構築されると同時に、その世界から制約された、世界を構成する文法・秩序によって貫かれている。つまり、身体は自らが構築した世界システムの中で、そのシステムを支える力によってそのシステムに適うように作り直され続けるダイナミックな運動につけられた名前なのである。

⑤　『王弼集校釈』中華書局一九八〇年をテキストとした。引用文の下の数字は、章番号である。現代語訳においては、『老子四種』大安出版社一九九九年を参照した。

⑥　権力についてミシェル・フーコーは次のように言っている。「権力という語によってまず理解すべきだと思われるのは、無数の力関係であり、それらが行使される領域に内在的で、かつそれらの組織の構成要素であるようなものだ。絶えざる闘争と衝突によって、それらを変形し、強化し、逆転させる勝負＝ゲームである。これらの力関係が互いの中に見出だす支えであって、連鎖ないしはシステムを形成するもの、あるいは逆に、そのような力関係を相互に切り離す働きをするずれや矛盾である。更に言うなら、それらの力関係が効力を発揮する戦略であり、その全般的構図ないし制度的結晶が、国家の機関、法の明文化、社会的支配権において実体化されるような戦略である。」（傍点原典）『性の歴史Ⅰ知への意志』渡辺守章訳　新潮社一九八六年）。橋爪大三郎は「権力とは、行為者の了解を介して、すなわち、ひとが、自分の属する社会の社会秩序のもとで、社会（体系）の（より）全体的・集合的な作動連関の仕方をこれこれと見越し予料することを（たとえ暗黙のうちにであれ）媒介にして、その行為する主体当人の身体にはたらいてしまう、間身体的作用力のことをいう。権力は、社会の現存性をつくりだすという、累乗的性格をそなえることになる。」（『橋爪大三郎コレクションⅠ身体論』勁草書房一九九三年）と言っている。

⑦　栗田直躬氏は、「『老子』に見える「自然」という語のすべてが、政治及び処世という実践的教えを説くことば」（「上代シナの典籍に見えたる「自然」と天」『中国思想における自然と人間』所収岩波書店　一九九六年、初出『フィロソフィア』第二二号一九五二年）だと読み解いている。

⑧　『老子』の道は、「道可道、非常道。（1）」と言われていたように、突然説き出された概念ではなく、すでに言語的に成立した道という概念を基に、それを否定あるいは超越することによって差異化された概念であって、道の意味はずらされてもその方向性は保持されている。

⑨　『老子』において、聖人の具体的例として固有名が挙げられないのは、それが実体的意味了解を生み、結果的に聖人が既にある絶対的主体存在だ、として捉えられることを恐れたからである。なお、前掲拙論参照。

⑩　金谷治『老子』講談社一九八八年、木村、大浜、福永前掲書。これらに対し、板野長八氏は、「そこ（小国）においては、民は一見全く自由なるが如くにしてしかも聖人王者に対してなんらの独自性を有しないが如く、小国は自給自足し全く自由なるが如くして、しかも封鎖的な境地にあって他より孤立し、なんらかの独自性もなんらの積極性も有しない。ここに国家ないし大国の専制的支配が見られる。」（「老子の無」『中国古代社会思想史の研究』所収研文出版二〇〇〇年、初出『オリエンタリカ』第二号一九四九年）と小国寡民を政治戦略的システムであるとの卓見を示していた。

『老子』的道与身体

Keiji HASHIMOTO

在『老子』来说、「道」是最重要的概念。从来、研究者解释过「道」是世界的根源与始源、好像是实体的存在。但是、『老子』说、「道常无名」、「道隐无名」、再说「字之曰道」。这些言说表达「道」不是实体的存在、是『老子』作成的概念、而且是根据「自然」称为的概念。从这样命名以後、『老子』把「道」变成了世界之根拠、而那世界安照「道」再构筑了。

这样来看、『老子』的「圣人」与「民」也都不是实体的存在、是互相依存的关系存在。就是说、「圣人」与「民」都是根据政治的权力关系来生成的概念・存在、而作成「圣人」与「民」的方法是「道」。

这『老子』的「圣人」是唯一的政治支配者。『老子』认识最好的平治国家的方法是、不使「民」参加权力游戏。于是、『老子』考虑到两个方法。

一个是、「圣人」隐蔽自己的身体。就是说、不旦使「民」不能认识所集中「圣人」的政治权力即「圣人」的身体、而且使「民」觉得被「圣人」支配是「自然」的。

另一个方法是、使「民」解体用欲与知作成的社会的身体、作成与「道」一体的身体、而监禁在一个小小的国家所谓「小国寡民」。

总之、『老子』是、为了维持国家安定、使「圣人」作成隐蔽权力的身体的战略的言说。